

## 蘭学者たちが

## 恩師ゴロヴニンの書物を翻訳した話

奥 正敬

## ■はじめに

江戸時代も後半に入った文化年間、徳川幕府は北方領土の国後島で捕らえたロシア海軍の軍人を函館で幽閉していました。この軍人の名前をワシーリ・ミカイロヴィッチ・ゴロヴニン (Vasily Mikhailovich Golovnin, 1776-1831) と言い、拘束されていた短い間でしたが、彼のもとで有名な蘭学者たちがロシア語や諸科学を学びました。やがて、この事件は大きな展開をみせ、ゴロヴニンは釈放されて母国に戻り体験記を執筆し、彼から学んだ蘭学者や影響を受けた人たちはオランダ語版を入手して日本語へ翻訳しました。

ここでは、その翻訳に至る経緯とこの事件に関わった人物による書物について振り返ってみたいと思います。

## ■ゴロヴニンとリコルド、北太平洋へ向かう

ゴロヴニンは1806年にスプール艦ディアナ号の艦長となり、翌1807年から北太平洋の領土調査の任務を帯びてカムチャッカへ向かう大航海へと出発しました。この艦の副艦長はピョートル・イヴァノヴィッチ・リコルド (Petr Ivanovich Rikord, 1776-1855) でした。彼は、奇しくもゴロヴニンと同じ年齢で階級はどちらも海軍少佐でした。この頃、ロシアは海洋国家を目指して海軍力を強化しており、ゴロヴニンは年若くして海軍へ入り、当時最強と謳われたイギリス海軍へ派遣されて、トラファルガー海戦でフランス海軍と戦うネルソン提督の戦術を間近で見ると、海軍軍人としての英才教育を受けていました。こうしたこともあってか、ゴロヴニンが航海の指揮をとり、リコルドが彼を補佐することになったようです。

ディアナ号はバルト海にあるクロンシュタットの軍港を出港してから、天候に恵まれない大西洋を南下して喜望峰近くのシモンズ港に停泊

するまで約十一カ月を要しています。また、この港では悪化していた露英関係の影響を受けて一年以上の間イギリス海軍に拘束されることになりました。漸くイギリス海軍の間隙をぬってディアナ号は脱出しましたが、クロンシュタット出港から喜望峰を通過するのに約二年を要していました。

その後、インド洋から東南アジアを経て太平洋へ入り、1809年の秋にカムチャッカ半島にあるペトロパブロフスクへ到達しました。ここを根拠にして、1810年には北米のアラスカ湾添いにあるシトカ島やロシアが設立したばかりの露米会社の植民地であるバラノフ島など、北太平洋を広く調査しています。

## ■ゴロヴニン、日本の捕虜となる

1811 (文化八) 年にはロシア海軍総監部からクリル諸島 (千島列島) の探検調査の命を受け、ディアナ号は南下をはじめました。

この目的は択捉島の東海岸までの測量でしたが、調査活動の中でディアナ号とロシア海軍にとって不測の大事態が起きました。ゴロヴニン艦長らは薪水等の補給のために自ら国後島へ上陸し、この島を守備していた日本の南部 (盛岡) 藩士によって同艦長と八人の乗組員が捕らえられたのです。

1812 (文化九) 年、リコルドは艦長が不在となったディアナ号を指揮してペトロパブロフスクへ帰港します。ここでリコルドはゴロヴニンを救出するための作戦をたて、再び千島列島沿いを南下します。

この時、同艦はカムチャッカ沖で難破船から救助された六人の日本人と、先にロシア使節として長崎を訪れたニコライ・レザノフが、通商交渉が不調に終わった恨みから1807 (文化四) 年に二人の部下に行かせた択捉島襲撃事件で連れ帰っていた良佐衛門らを同乗させていました。

リコルドは国後島沖で日本との交渉を申し入れましたが、守備隊はこれを拒否したため日本人に手紙を持たせて下船させました。翌日、その一人からゴロヴニンたちは既に処刑されたと知らされました。リコルドはこれを聞き、報復